



TITLE:

最近五十年支那學界の回顧(五完)

AUTHOR(S):

マスペロ, アンリ; 内藤, 耕次郎; 内藤, 戊申

CITATION:

マスペロ, アンリ ...[et al]. 最近五十年支那學界の回顧(五完). 東洋史研究
1936, 1(6): 553-560

ISSUE DATE:

1936-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138715>

RIGHT:

最近五十年支那學界の回顧（五完）

ア ン リ ・ マ ス ペ ロ

内 藤 耕 次 郎 共 譯

内 藤 戊 申

文學 現代の支那の文學及び宗教の方面は政治的諸事

件に比して歐洲人の興味を惹くことが遙かに少かつた。

十八世紀に於ける訓詁學の復興——これは宋學の特徴である古典の哲學的解釋とは正反對に、漢代の解釋を忠實に襲はんとする（この爲に新學派は漢學と名づけられた）夫

の具體的な方法への復歸をその特徴として居るのであるが、この復興に就ては未だ何等研究されて居ない。唯漢

學派の反對者である章學誠に就ては幸ひ胡適氏の論文があり、Dennéville 氏が之を要約して居る。^①胡適氏は亦、

歴史家で且評論家である崔述の詳しい傳記の編纂にも手を着けて居る。現在支那の學界は非常な意氣込で西洋の研究法に同化せんと努めて居り、學生や教授はいづれも歐羅巴、亞米利加或は日本に赴いて數年間留學するとい

ふ有様である。この學問的運動は起つてから未だ日こそ

淺いが早くも多くの作品に於てその興味ある結果を示して居る。私が既に引用した胡適、張鳳、朱希祖諸氏の研

究、劉復氏の實驗的な語學的の研究、賀之才氏の國際法の研究等がそれである。^②學問的著述に於て文語の代りに白

話を使はうといふ努力が胡適氏を中心として試みられて居るが、この問題は歐羅巴では Duvyandak 氏により、

日本では青木氏によつて研究された。^③又現代の支那の青年に最も強い影響を及ぼして居る夫の梁啓超氏に就ては

神父 d'Elia ^④のお蔭でよく吾々に知られて居る。

註

① B. F. F. O., 1923, 478-79. 參照。

② 劉復 'Études expérimentales sur les tons du chinois' (漢語字聲實驗錄), 1925.

賀之、Les bases conventionnelles des relations modernes entre la Chine et la Russie (近代露支關係の協定原理), 1618.

③Dyvandak, A literary Renaissance in China, Act. orient, I, 285-317. 所載。

青木正兒、胡適を中心と渦いてゐる文學革命、支那學、第一卷、一九二〇年所載。

④P. M. d'Élia, Un maître de la jeune Chine, Liang Ki-tch'ao, (新支那の首領、梁啓超), Tp, 1917, 247-294. 所載。

近代の詩には殆んど獨創的な所がない。この事は Imbault-Huart の小詩集を見れば判る。然し乍ら近年西洋文學の影響によつて、より自由な詩の形式を採らうとす運る動が現はれ、^①Tsen Tson-ming 氏はその起源と特徴とを簡明に述べて居る。別に張鳳氏は傳統派と改革派の兩方を含めて現代詩人に就て略述して居り、又 ^③Deniéville 氏は胡適氏の詩を検討して居る。けれども近代文學の中で最もよく研究されたものは詩よりも寧ろ戯曲と小説とである。どちらも俗語で書かれたものだが、その起源は恐らく唐末迄溯るものと思はれる。戯曲に關する最も良い著述は ^④Bazin のもので、これは八世紀頃迄その淵源を辿つた後、元代及び明代のいくつかの戯曲を翻

譯し且分析したものである。その他のものでは Stan Julien の翻譯がある。他方宋代及び元代の戯曲の歴史は最近王國維氏によつて編まれたし、その他十三世紀に流行した戯曲の種類の創始者關漢卿は青木氏によつて研究された。朱家健氏並びに Johnston 氏は現代の戯曲を説いて居り、Pelliot 氏は歐羅巴的傾向のある詩に就ての概要を述べて居る。^⑤小説に就ては蔣瑞藻氏の拙い小説史がある他に、最も重要な小説の中の二つの小説の源流に關する立派な論文が胡適氏によつて發表されて居る。小説の翻譯されたものには三國志の如き歴史小説、紅樓夢、玉嬌梨の如き風俗小説等及び聊齋志異——之は短い話を集めたもので文章體で書かれて居る——今古奇觀等がある。^⑥

註

①Tsen Tson-ming, Essai historique sur la poésie chinoise(支那詩小史), 1922.

②張鳳、L'évolution poétique en Chine, ap. Le Paon (支那の詩の革命、附録、孔雀東南飛), 21-43.

③Deniéville, B. E. F. E. O., 1924, 301. 所載。

④Bazin, Théâtre chinois ou choix de pièces de théâtre composées sous les empereurs mongols (支那の劇、或は蒙古時代に作られた戯曲選集), 1888; Le Pi-pa-ki

ou l'Histoire du luth(琵琶), 1841.

- ⑤ St. Julien, Si-siang-ki, ou l'Histoire du Pavillon d'Occident (配廬記), ㄆㄨㄣˊㄒㄩㄥˊ I-Y, 1873-78. 所載。Hoei-lan-ki ou le Cercle de craie (灰蘭記), 1882; Tchao chi kou eul, ou l'Orphein de la Chine (趙氏孤兒), 1884.

⑥ 王國維, 宋元戲曲史。

⑦ 青木正兒, 元代雜劇の創始者關漢卿「支那學」第一卷、一九二一年、第六號、二六—四一頁所載。

⑧ 朱家健, Le théâtre chinois (支那の劇), 1922. (Jacovleff の筋書を引)。

R. F. Johnston, The Chinese drama, 1921. Peliot, B. E. F. E. O., 1909, 623-626. 所載。

⑨ 蔣瑞藻, 小説考證。

胡適, 紅樓夢考證, 一九二一年刊, 胡適文存, 一集, 卷三, 一八五頁所載。西遊記考證, 一九二三年刊, 同上二集, 卷四, 五一頁所載。

⑩ Th. Pavie, San kou tch, Histoire des Trois Royaumes, roman historique (歷史小説「三國志」, 1845-1851. (未完)

Bencat Joly, Hung lou méng (紅樓夢) or the dreams of the Red Chamber, 1892.

St. Julien, Les deux cousines (玉嬌梨), 1864 ;

Les deux filles lettrées (牡丹吟燕), 1860.

Herbert Giles, Strange stories from a Chinese Stu-

dio, 1890(聊齋志異)。

今古奇觀の翻譯に關して H. Cordier, Bibliotheca Sinica, 1761-69. 參照。

宗教 近代の宗教の歴史に就ては F. G. Henke 氏の The Philosophy of Wang Yang-ming (王陽明), 1916.

以外には何等研究されたものが無い。この書は十六世紀に官學の説く所に反對の意見を持して居た王守仁(陽明)によつて企てられた儒教の哲學的再建に關する研究である。但し或る地方に於ける現代の宗教生活を敘述した良書はなすではなす。Grube の國教に關する敘述は少しく型に嵌り過ぎては居るが役に立つ本である。だが De Groot の支那人の教理論に就ての論文は餘り氣の利いたものではない。又神父 Wiegert は現代社會に於ける古代思想と近代思想の交互作用を示す所の文獻を集めて居る。近頃上海に於て佛教及び道教の藏經が次々に出版されて居るが、この事は長い間閑却されて居たこの方面の問題が再び支那人の興味を喚び起し始めたことを示すものである。

註

① De Groot, Les fêtes annuellement célébrées à E-

noui (廈門に於ける毎年の祭), Ann. Musée Guimet, XI-XII, 1886 (和蘭語原刊、一八八一年) 所載参照。

P. H. Doré, Recherches sur les superstitions en Chine (支那に於ける迷信の研究), 1911-24 (江蘇省に於ける⑤), Var. Sin., 32, 34, 36, 39, 41, 42, 44, 45. 所載。
R. F. Johnston, Lion and Dragon in Northern China, 1910 (主として山東省の⑥); Buddhist China, 1913 (普陀山及び東部支那)。

②Grube, Religion und Kultus der Chinesen (支那人の宗教と禮拜), 1910,

③De Groof, Universalismus, 1918.

④Wieger, Le Flot qui monte, 1922.

近代に於ける外來の宗教は回々教と基督教とである。

回々教はその起源は比較的古いのだが、蒙古時代以前に於ては殆んど見るべき發展はなかつた。この起源に就ては①Dévéria が、又蒙古時代の經過に就ては、雲南の有様をば A. Vissière 氏が、泉州の有様をば Arnáiz が研究して居る。回々教の歴史は嘗て Dabry de Thiersant がその編纂を試みたことがあるがやり直す必要があらう。回教の現状は Broomhall と Vissière 氏のを蔭で漸く知られる様になつて來たし、又 Massignon 氏の 1

Annuaire du Monde musulman (回教年鑑) にも手短に略述されて居る。回々教徒の著述の分析的な目録は⑤Palladius が既に十九世紀半に作つて居たのだが、一九〇九年に至つて始めてその全部が公にされた。その他目録には Ristelhueber 氏、Ogilvie, Zwerner 兩氏及び Vissière 氏の⑥がある。又 Isaac Mason 氏はモホメントの支那語の傳記を翻譯して居る。

註

①G. Dévéria, Origines de l'Islam en Chine (支那に於ける回々教の起源), Centenaire de l'École L. or., 1895. 所載。Itinéraires de pèlerins chinois se rendant à la Mecque (マッカへ赴いた支那巡禮者の旅行記), Rev. Extr. Or., 1882. 所載。

②Vissière, Études sino-mahométanes (支那回教研究), Arnáiz et Max van Berchem, Mémoire sur les antiquités musulmanes de Ts'ian-tcheou (泉州の回教古美術に就て), Tp., 1911, 677-737 所載。

③Dabry de Thiersant, Le mahométisme en Chine et dans le Turkestan oriental (支那及び東トルキスタンに於ける回々教), 1878.

④Broomhall, Islam in China, a neglected problem, 1910.

③ Palladius, *Kirajskaja literatura Mahometan* (支那の回教文獻), Publ. Soc. archéol. russe, XVIII, 163-196. 所載。

④ Rischelhuber, *La littérature musulmane en Chine* (支那に於ける回教徒の文獻), *Rev. du Monde musul.*, 1908, 512-515. 所載。

Ogilvie et Zwemer, *A classified bibliography of books on Islam in Chinese-Arabic*, Chin. rec., 1907, 632-659. 所載。

⑤ I. Mason, *The Arabian Prophet, a life of Moham-med...* by Lin Chai-lien, 1921.

基督教の傳道の歴史が齎した文獻は實に夥しき量に上るので、ここでは單なる概要を示すことへ出來かねる程である。加特力の傳道史はその全體を神父^① de Moidrey が、ジエズイット派の傳道史は神父^② Havret と H. Cordier とが取扱つて居る。尙又この時期に關しては重要な諸問題を扱つた優れた特殊論文がある。神父^③ Brucker の儀式上の論争に關するもの、^④ H. Cordier の耶蘇會の禁止に關するもの等がそれである。近代の傳道會には夫々その歴史が編まれて居るものが若干あるが、中で最も優れて居るのは神父^⑤ de La Servière の江南傳

道會の歴史である。新教の傳道會に就ては、一九〇七年に最初の傳道師 Morrison の廣東來着の百年祭を記念する爲にその通史が公にされたし、^⑥且又多くの特殊論文も發表されて居る。

註

① P. de Moidrey, *La hiérarchie catholique en Chine, en Corée et au Japon (1307-1914)* (支那、朝鮮及び日本に於ける加特力會の等級), Var. Sin., n° 37, 1914. 所載。

② P. Havret, *La Mission du Kiang-nan* (江南傳道會), chap. i-ii, 1900.
H. Cordier, *China : Society of Jesus*, ap. *Catholic encyclopedia*, III, 672.

③ P. Brucker, *Cérémonies chinoises*, ap. *Dict. de théologie catholique* (支那の禮式。附録「加特力神學の啓示」), II, 2364-2391.

Cordier, *La suppression de la Compagnie de Jésus et la Mission de Péking* (耶蘇會の禁止と北京傳道會), Tp., 1916, 273-347, 561-623. 所載。

④ P. de La Servière, *Histoire de la mission du Kiang-nan* (江南傳道會史), 1914.

⑤ Centenary history of Protestant Missions, 1907.

⑥Broomhall, A Jubilee story of the China Inland Mission, 1915.

五、支那の美術

支那の美術史の良書は未だ現はれて居ないし、ドイツに就ての充分な研究がされてないから今後も當分良書は出ないであらう。併しとも角 Paleologue, Bushell 及び Münsterberg の一般的著述は支那美術の發展とまではいかずとも少くとも年代的系列の觀念を吾々に與へて呉れる。彫刻に關しては大村氏がしつかりした記録に基いた勞作を著はして居る。その他では日本の雜誌國華並びに東瀛珠光は、その記事とその美しい複製とを以て初步研究の材料を提供して居る。

之に反して特殊論文は種々の部門に亘つて發表されて居り、その多くは非常に優れた研究である。即ち Boerschmann の、精確な平面圖と表とを附した近代寺院の記述、小川氏、奥山氏及び Siren 氏の清朝の帝室宮殿に關するもの、^④Bouland 氏と Vaudescal 少佐の北京附近の明の陵墓に關するもの、^⑤Fonsagrives の清の陵墓に關するもの等である。Chavannes の、主として山東省の

石の彫刻及び龍門の岩石の彫刻の集録、^⑥Segalen 探險隊の、四川省に於ける漢代の彫刻及び江蘇省に於ける梁代の彫刻の集録を始めとして、^⑧外村氏の天龍山洞窟（山西省）の寫眞、^⑨Pelliot 氏の燉煌千佛洞（彫刻及び繪畫）の寫眞、^⑩H. Maspero 氏の、杭州附近の靈隱寺の岩上彫刻の概括的記述及び ^⑪Roland Bonaparte 公爵の、居庸關の彫刻及び碑銘の寫眞、並びに ^⑫Siren 氏の集録は五世紀より十四世紀に至る迄の彫刻に對する立派な綜合的資料たるを失はない。繪畫に於ては ^⑬Pelliot 氏と ^⑭Waley 氏の二人が若干の評論を—極く最近—試みた最初の人々である。といふのはそれ迄は ^⑮Herbert Giles 氏の譯した逸話集があつただけだから。技術的方面では ^⑯Petrucchi が十七世紀の支那語の提要書を譯して居るので吾々は十分その智識を持つて居る。磁器の歴史はずつと前から研究されて居るが、最近 ^⑰Hobson 氏が優れた著述を出して居り、之に加ふるに ^⑱Laufer 氏の磁器の起源に關する論文を以てすれば先づ完全なものとなるわけである。その他の工藝品（銅器、漆器等）は餘り研究されて居ない。^⑲Laufer 氏、^⑳Pope-Hennessy 夫人及び ^㉑Pelliot 氏の古代

の玉の研究があるが、その歴史は未だ殆んど識られて居ない。

註

- ①Pateologue, L'art chinois (支那美術), 1887.
Bushell, Chinese art, 1904.
- Münsterberg, Chinesische Kunstgeschichte (支那美術史), 1910.
- ②大村西崖「支那美術史」一九一五年
- ③Boerschmann, Die Baukunst und religiöse Kultur der Chinesen(支那の建築術及び宗教文化), 1911-14.
- ④小川一真「清國北京皇城寫真帳」一九〇六年刊。
奥山恒五郎「北京皇城建築裝飾」一九〇六年刊。
O. Siren, Les palais impériaux de Pékin (北京の宮殿), 1926.
- ⑤Bouillard et Ct. Vaudesca, Les sépultures impériales des Ming, Che-san-ling(明の陵墓)十三卷, B. E. F. E. O., 1920, n° 3. 所載。
- Combaz, Les sépultures impériales de la Chine (支那の陵墓), Ann. Soc. archéol. Bruxelles, 1907. 所載。
Fonsagrives, Si-ling, étude sur les tombeaux de l'Ouest de la dynastie de T'sing (清の西陵の墓), 1917, Ann. Musée Guimet, t. XXXI. 所載。
- ⑥Chavannes, La sculpture sur pierre sous les Han, et Mission archéologique dans la Chine septentrionale (漢代の石彫と北支那の考古學探險隊), 1918.
海濱竹太郎「中川忠順『Rockcarvings from the Yunkang(雲岡)Caves, 1921.
- ⑦V. Segalen, G. des Voisins et J. Lartigue, Mission archéologique en Chine (支那考古學探險隊), (1914-1917), t. I, La sculpture sur pierre..... du Chan-si du Sseu-tch'ouan (山西省及四川省の石彫), 1924.
- ⑧外村太治郎「天龍山石窟」一九二三年。
- ⑨Pelliot, Touen-houang(敦煌), 1920-24.
- ⑩H. Maspero, Rapport sommaire sur une mission archéologique au Tch'ou-kiang (浙江省の考古學探險隊の報告書), B. E. F. E. O., XIV, (1914), n° 8. 所載。
- ⑪Prince Bonaparte, Documents de l'époque mongole (蒙古時代の記録), 1895.
- ⑫Siren, La sculpture chinoise du Ve au XIVe siècle (五世紀から十四世紀迄の支那の彫刻), 1925.
- ⑬P. Pelliot, Notes sur quelques artistes des Six dynasties et des T'ang (六朝及唐の畫家に就て), Tp., 1928, 215-291. 所載。
- A. Waley, An Index of Chinese artists represented in the Sub-Department of oriental prints and draw-

ings in the British Museum, 1922. 及び An Introduction to the Chinese painting, 1928.

⑭Giles, An Introduction to the history of the Chinese pictorial art, 1897.

⑮R. Petrucci, Kiai tseu yuan houa tchouan, Encyclopédie de la peinture chinoise (芥子園畫傳), 1918.

⑯Hobson, Chinese pottery and porcelain, 1915.

Lauter, The beginning of porcelain in China, 1917, 及び Jade, a study in Chinese archeology and religion, Field Museum Publ, n° 154, 1912. 所載。

⑰M^{me} Pope-Hennessy, Early Chinese Jades, 1928.

P. Pelliot, Jades anciens de la collection de M. Loo (盧氏所藏の古代の玉), 1926.

周知の如く支那學研究の努力は從來主として古代、宗教、美術並びに蒙古帝國時代前後の中央亞細亞の智識に向けられて來た。そしてこれ等の方面では全て著しい進歩を遂げて居る。現在、支那の社會の歴史が眞に科學的な方法で敘述される様な時期には未だく遠い有様ではあるが、歐羅巴、日本及び支那人の緊密な協力によつて、少くとも吾々の智識の最も重要な間隙が少しづつ埋めらるだらうとの期待は許さるべきものであらう。(完)

杉然たる人參史

清朝は人參に興つて鴉片に亡びた—とは、たしか稻葉博士の名言であつた。一個の人參が如何に大きく東洋人の生活に喰ひ入つてゐるかを語つて妙である。近く今村軻氏、椽大の筆を振つて杉然たる人參史八卷の公刊を企圖せらるゝものは、實にこの人參の東洋史上に於ける重大なる役割を洞察せられてのことである。企てらるゝ所の八卷は、第一卷人參思想篇、第二卷人參政治篇、第三卷人參經濟篇、第四卷人參栽培篇、第五卷人參醫藥篇、第六卷人參雜記篇、第七卷人參名藥考篇、第八卷人參年表引用書目索引解題、と凡そ人參に關する限り考察さる可き領域を盡して剩さず、うち第七卷參名篇、第二卷政治篇が夫々六百頁内外、書の體裁も善美を凝らして已刊せられた。參名篇に博蒐せられた參名と、その附圖とに著書の異常なる努力を伺つた讀者は、更に政治篇に於ける著者の人參史論の「人參は支那に於ては産地の採取官營が罪人を多からしめ、朝鮮に在ては其の誅求苛斂が甚しき虐政となつて現はれ、日本に於ては醫藥行政上よりせる栽培施設が濟世救民に多大の効果あつたものだ」と適切に概括せられおるうちに、脈々經世の眞情を吐露して、明確なる史實を展開せられおるを見ては、この種著述の撰者の較々もすれば單なる好事癖の満足に終れるとは、遙かに類を異にするものあるを看取し、尙殘る六卷にも多大の關心と興味とを繋がすにはゐられないであらう。著者の自愛に俟つて其の完行の一日も早からんことを切望するものである。(朝鮮總督府專賣局發行、非賣品)(今西)